

イエスがエルサレムを目指して歩まれている途中の、サマリアとガリラヤの間を歩いているところで、ある村に入ると10人の重い皮膚病を患っている人たちが遠くに立ち留まったままで出迎えを受けられました。そして口々に『どうか、わたしたちを憐れんでください』と叫びます。イエスは何か具体的な癒しの行為をすることもなく、14節『祭司たちのところに行つて、体を見せなさい』と言われた、とだけの説明しかされていません。

ところが、彼ら10人の重い皮膚病の人たちは祭司のところに行く途中で、清くされたのです。10人のうち1人だけが、そのことに気づき、『大声で神を賛美しながら戻つて来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した』(15～16節)のでした。その1人の人物がサマリア人であったと聖書はシンプルに記しています。ただ、この出来事を読んだ人たちは考えたに違いないのです。

それはイエスの時代のサマリア人と言うのは、紀元前721年に来たイスラエル王国がアッシリアによつて侵略されて以来、ユダヤ人でありながら異邦人と結婚するようになったため、ユダヤ人たちから差別され蔑視されるようになりました。そのため自分たち独自の神殿を造つて犠牲祭儀をしていた人たちです。エルサレム神殿とは違う神殿を造つたこともユダヤ人たちに嫌われる理由になったのです。ですから、ユダヤ人の中でも、律法に厳格なファリサイ派の人たちは彼らに本当の信仰があるとは考えていなかったのです。そういう前提があることを踏まえた上で今日の聖書個所を読まなくてはならないのです。

ですから、18節冒頭でイエスに『この外国人(＝異邦人)』と言われているのです。ところが、イエスは19節で『あなたの信仰があなたを救つた』と癒された原因を指摘しているのです。つまり、ユダヤ人から見れば本物の信仰などあるはずがないサマリア人に対して、あなたの信仰のゆえにあなたの重い皮膚病は癒され、救われたのだと言ったのです。このサマリア人は重い皮膚病が癒されたことを知つてイエスのところに戻つて感謝の意志を示したのです。

私たち現代人の意識を強く支配していることに、それがどれだけ役に立つかという基準があります。宗教も同じで、自分の役に立つことがその宗教にあるのかという問いが必ずあります。新興宗教やカルト宗教に共通しているのは、この意識です。その宗教がどれだけ自分に利益や得をもたらしてくれるかという基準で判断するところがあります。芸能界に創価学会員が多いのも、自分のコンサートや舞台に来てくれる人が保証されているからです。

このような意識は日常生活ではある意味必要なことなので、信仰の世界にも当然入り込んでくる危険性があります。このような意識が私たちの信仰生活を侵食してしまうのはたやすいことなのです。私たちを創造し、私たちを憐れみ、私たちを導いてくださる神は、私たちに必要なものを備えてくださる方であり、私たちのすべてを究めようとされるお方です。キリスト教礼拝というのは、この世的に何か自分に利することを獲得するような場ではないのです。私たちに必要なものがすでに与えられていることを知つて感謝するための集いなのです。

今日の聖書個所に登場する重い皮膚病を癒していただいてイエスのもとに戻って感謝お石を示したサマリア人は、イエスの時代に人々から疎まれ、親族とも一緒に暮らせなくて、疎外されていた人物です。また、ユダヤ人から異邦人扱いを受けていた人たちです。祭司のところへ、清くなったことを証明してもらい社会復帰することができた人物になることができたのは一体誰だったのか。おそらく、イエスのもとに戻ったサマリア人以外は社会復帰したことでしょう。

けれども、イエスのもとに戻って感謝の意志を示したサマリア人は、祭司のところに行っただとしても祭司によって清くなったことを証明されることはなかったはずで。しかも、彼は重い皮膚病が癒されて清くなったにもかかわらず、ユダヤ社会で受け入れられることはないのです。そのような人物がイエスに感謝するために戻って来たのです。これは現代における礼拝に集う私たちを何を教えているのでしょうか。

神を信じる信仰というのは、自分が癒されることを取引材料にするものではないということ。すべての人間は神の恵みによって創造され、神の憐れみの中に置かれているのです。この神の憐れみは神の愛に気づいた者は感謝する者となるのです。けれども、すべての人間が、神の愛に気づくわけではありません。

本日の聖書個所の次のところで、ファリサイ派の人々が神の国はいつ来るのかとイエスに問いかけています。この問いは神の愛に気づいていないから出てくる問いです。自分が律法を守ることで神の愛を受けるにふさわしい人間になることばかり考えているファリサイ派の人々にとって、すでに与えられている神の愛に気づいていないのです。気づいていないから、神の愛に満たされた状態を表す神の国はいつ来るのかという問いを発することになってしまうのです。

2

現代人も自分の力に頼ることしか知らず、自分の力で人生を切り拓いていくことばかりを考えてしまっているために、神の愛を信じ切ることができず、自分に役立つか否かを基準にしてすべてを決定する生き方を選択してしまい、それ故に互いが互いを利用しあう利己主義的な人間関係しか築くことができずに、人間関係に疲れてしまってしまう。そのようなようになってはいいか、私たち一人一人は自分の信仰のスタイルを検証してみなければなりません。

私たちキリスト者が礼拝をするのは、神から何か自分のためになることを獲得するためではなく、イエス・キリストを通して知らされている神がすでに私たち一人ひとりを愛して必要なものを与えてくださっていることを感謝するために集っているのです。

そして、私たちは神の愛に生かされてことに気づいて感謝する者にされたことを、この世に対して証しするように招かれていることを、それぞれの現場で実践していくのです。人間が神の導きによって生かされている喜びを皆の前で証しし、神に感謝する生き方があることを示していく。そこに、神に愛された者としての使命があるのです。確かに、清くされるような事態は喜ばしいことでしょう。しかし、私たちキリスト者はその先を見ていく。この世に神の愛の支配が貫徹していることを告げ知らせしていくのです。